

## 研究紹介 Rhif 6

Robert Morris Jones (1974)

**'Literary and Colloquial Welsh: Some Points of Divergence',  
*Studia Celtica Japonica*, No. 8: 1-14, Amagasaki: The Celtic  
Society of Japan**

水谷 宏

前号の **研究紹介** Rhif 5 の最後のところで触れた Robert Morris Jones 氏の論文である。カムライグ語では、「文章語」Cymraeg Llenyddol / Literary Welsh と「口語」Cymraeg Llafar / Colloquial Welsh との相違の大きいことがしばしば指摘を受けている。筆者の知る限りでは、この事実への専門家の公式の発言は、社会言語学的観察が現在のように発達するはるか以前、今から 100 年以上も前のことである。即ち、Syr John Rhŷs (1896): 'Chapter VIII Linguistic Conditions: Welsh and English', *Royal Commission on Land in Wales and Monmouthshire Report*, pp. 78-97 における発言である。その後、Syr Ifor Williams (1945?) 'Cymraeg llwyfan', *Meddwn i*, tt. 52-56 においても、同様に社会言語学的観察に基づく発言が見られる。この二人の先人の発言については、その概略を別稿（水谷宏「付帯状況表現：dan と gan」『日本カムライグ研究』第 1 巻第 1 号 tt. 10-11）で紹介した通りである。しかし、そうした相違について、極めて体系的に、かつ、記述的に論じたものは、恐らく、この Morris Jones 氏の論文がカムライグ語史上初めてであろう。20 世紀に入り、特に、戦後、後半において、方言研究への関心が高まり、カムリ大学への学位請求論文等々で、各地の方言の研究結果が公表されたことが、「文章語」と並んで「口語」への関心が寄せられるようになったものと言えよう。

Morris Jones 氏の論文は、カムライグ語の「文章語」と「口語」の相違について、純粹に記述的な立場に立って、概略、以下の 7 つの点に関して、極めて要領よく纏められている。まず、「文章語」と「口語」との定義について述べたあと、1) 両変種に観察される音声学的な相違、2) 動詞の屈折語尾に見られる形態音素論的な相違、3) 完了を表す付加辞の使用に見られる相違、4) 時制の相違、5) 決定辞の相違、6) 形容詞や名詞の性・数の相違、7) 動詞前虚辞の相違、そして最後に、8) 語彙上の相違について、戦後、急激に増大し続けていた英語からの借用語の使用など、いくつかの特徴的な点を指摘している。

カムライグ語の学習者としても、また、研究者としても、このような変種間に観察される相違に関しては、無関心ではいられない。まずは、Morris Jones 氏のこの論文を読むことから始めるのが一番の近道であろう。